# 横浜税関（改修）

# Yokohama Customs Office Renovation

# 保存された外壁と刷新された中庭

# Preserving the exterior while reforming the courtyard

受賞：第46回建築業協会賞BCS賞(平成17年11月) / 第12回公共建築賞国土交通大臣表彰※共に香山壽夫建築研究所と共同

所在地：神奈川県横浜市

用途：庁舎

設計：香山・アプル設計共同体＋香山壽夫建築研究所＋アプルデザインワークショップ

構造：SRC造（既存改修棟）S造＋SRC造（増築棟）

規模：地上７階塔屋５階

建築面積：4,024

延べ床面積：15,955㎡（増築部分7,092㎡）

施工：戸田・銭高特定建設工事JV

竣工：2003, 11

写真：三輪晃久写真研究所

この建物はかつての旧門司税関の庁舎である。1909年（明治42年）門司港が一般開港に指定され、税関が設けられたので、1912年（明治45年）妻木頼黄の指導のもとに建築技師咲寿栄一により設計され、昭和初期まで税関庁舎として使用された。その後、この建物は民間に払い下げられ事務所として利用された後、倉庫に転用された。その際に、海側の両翼部が取り壊され、窓はコンクリートブロックで塞がれ、2階の床組みから内装まですべて撤去され、長らく荒廃した姿をさらしていた。しかし残された御影石の装飾などを見れば、明治時代の赤煉瓦建築として貴重な遺構であるだけでなく、門司港地区の歴史的建造物群の中でも意匠的にも優れた建物であることは十分にうかがい知ることができた。北九州市では、門司港港湾地域の活性化策として進めている門司レトロ地区を構成する施設として、この建物を活用するために取得。九州芸術工科大学片野博助教授を座長とする保存検討委員会に保存、修復方法を諮問し、両翼部の塔の復元を含む、復元・改修による動態保存の提言を受け、今回の改修工事(1992年〜1994年）となった。

今回の保存・改修工事は、既存煉瓦躯体、瓦屋根の補修・復元工事と新たなデザインによる改修工事に大別できる。

補修・復元工事は、

①煉瓦躯体の補修、補強

②不同沈下対策

③建物外観の復元

である。①については控壁の新設、壁量不足を補うための煉瓦による壁厚の増し積み、大断面集成材による臥梁の追加などである。②は、主に松杭の柱頭の腐食と地盤の流出によるものなので、空隙部分にセメントベントナイトを注入している。③は、原則的には倉庫使用時以前、できれば創建当時の姿に戻すことであるが、竣工当時の写真の点数に限度もあり、十分考証ができなかったので、復元は最小限にとどめ、場所によっては倉庫使用時の改変も「時間の痕跡」として残した。そのひとつの例が、倉庫への物の出し入れのために大きく開けられた東西の大きな開口である。あえて復元をせはめた大開口としている。この考え方は、内部のインテリアについても同様で、復元は基本的には行わず。汚れた煉瓦をそのまま見せた。

一方、新たなデザインによる改修工事は、

・木造軸組みによる2階の新設

・集成材を使った小屋組みの新設

・入口キャノピーの新設

・護岸側にあった平家の付属屋（創建当時からのものかどうかはわからない)の平面形

だけを暗示する外構の整備などである。

屋根は小屋組みが取り替えられており、屋根勾配も創建当時とは違っていたので、新規につくり直した。脆弱な煉瓦壁に不要な横荷重を加えないように、軽い木造とスティールロッドの複合梁を用い、小屋組みを内部空間に積極的に参加させることにした。計画段階では、完成後の使用形態が多目的観光施設というような漠たるものだったので、あまり空間を規定しすぎると将来の利用勝手を制限すると考えた。煉瓦壁によって囲われた空間は、それ以上に強い分節はしないことにした。しかしまったく何もしないで使用者に放り投げるようなことも選択肢から外した。大きすぎる自由はかえって取っかかりをなくすと考えたからである。むしろ使い方を喚起するような働きかけは必要であると考え、煉瓦の壁によって大きく囲われた空間の中に細いフレームを挿入し、それに格子組みのスクリーンを絡ませ、それぞれの空間に固有の性格を与えつつ相互に響き合う関係を目指した。煉瓦の壁の中での工事という性格も考慮して、このフレームの材料にも軽い木造（燃え代構造）を選択した。このフレームもやはり煉瓦壁体に力学的負荷をかけないよう、すべて自立している。そして集成材の角柱を壁際に立たせることにより。ふたつの時代の構造物を近接させて見せ、両者の間に強い緊張関係をつくり出した。この施設は、1994年秋の開業以来、さまざまな展覧会やコンサート、TV番組の収録などに年間を通して活用されている。レトロ地区の核施設として、市民や旅行者に親しまれているのを見るのは設計者としてもうれしいことである。